

陽その時にたがはざらんことを禱り、世俗春夏に祓禊してもて疫鬼を驅る、驅といへども盡ることなし、凡天下に疫癘の流行せし、漢にいたりてますく盛なり、こゝをもて天仲景氏を生じて、永く疫鬼を驅しむ、

〔梅園日記〕送疫鬼。

日次紀事云、凡疫癘、春初多流行、中而唐土造紙船之類乎、按するに、紙船の事は、閩書風俗志云、正月上元十三四五日、各里造紙船送瘟鬼、中東海談云、享保十八年七月上旬より、東都大に疫癘はやり、上下貴賤、みな此氣に中りて病す、十三日十四日の比は、大路の往來もたえくなり、是は醫書にいはゆる天行時疫といふ者歟、邑里ともに、藁にて疫神の形を造り、かね太鼓をならして、是を南海へ流しぬなどあり、これ今もなほするわざなり、

〔談草小言〕民間ニ疫癘流行スルコトアレバ、疫病神ヲ送ルト稱シ、又疫病ヲ引ト號シテ、山伏ヲ先ニ立テ螺吹鳴シ物サハガシク、衆人コレニ從ヒ物ヲ驅ルガ如ク爲ルコトアリ、コレ古者方相氏爲儼ト云モノニ異ナラズ、サレバ其所爲ニ任ジテ可ナリ、又民間ニ富士講、大師講、又ハ金毘羅或ハ稻荷ノ流行神ナドイヒテ、人々信仰スルコトナレド、是ハ少皞氏之衰、九黎亂德、民神雜糅、家爲巫史、民瀆齊盟、禍災荐臻、ト云國語モノニテ、甚不可ナリ、予嘗テ農父タリシトキ、富士講等ヲ禁ジタリシガ、今如何ナリシヤ知ラズ、

〔宮川舍漫筆〕三 疫神

嘉永元年申年の夏より秋に至り、疫病大に流行なりし處、爰に不思議の一話あり、淺草邊の老女名念失或時物貫體の女と道連になりし處、彼女いふ、私事三四日何も給申さず、甚だ飢におよび申候、何共願兼候得ども一飯御振舞の程願といふ、老女答、夫は氣の毒なれども、折惡敷持合せ無之、爰かし蕎麥位の貯はあるべし、そばおふるまい申べしとて、蕎麥二椀たべさせける、彼女大きによ